人文地理学研究　XXIV　169～179　2000

地理学における文化的アプローチ

ポール・クラヴァル

Ⅰ　科学認識論におけるポストモダンへの転換と「文化的アプローチ」
　Ⅰ－1　人の多様性，人間集団の多様性，場所の多様性
　Ⅰ－2　物質性，歴史性，地理性
　Ⅰ－3　人間，人間集団，場所の関係的把握
　Ⅰ－4　表象としての地理，ディスクールとしての地理
Ⅱ　現代における文化的アプローチ
　Ⅱ－1　個人の軌跡，文化，共同主観の範域
　Ⅱ－2　文化の構成要素：環境技術，社会技術，価値
　Ⅱ－3　分析的なコミュニケーション，象徴的なコミュニケーション
　Ⅱ－4　制度化と文化の象徴的構築
　Ⅱ－5　超越的な存在
Ⅲ　文化的アプローチに関する理論的考察
　Ⅲ－1　基本概念の定義
　Ⅲ－2　相対主義の限界
　Ⅲ－3　相対主義からの脱却
　Ⅲ－4　生態学的制約の重要性
　Ⅲ－5　文化の変容
Ⅳ　結論

本講演のテーマは「地理学における文化的アプローチ」である．なぜ「文化地理学」ではなく「文化的アプローチ」という表現を用いるかというと，それは文化地理学という言葉が人文地理学と同じほど古い歴史をもつためである．ここでは，ことさらに「文化的アプローチ」という表現を用いることで，新しい側面を強調することにしたい．すなわち，「文化」というパースペクティブ（文化的アプローチ）を採用することで，文化地理学が昔から行ってきた研究をより深めることができること，さらにまた，文化的アプローチの採用は地理学全体についての考え方にも転換をもたらすこと，これらの点について述べるのが本講演の目的である．

内容は3部構成である．まず第一に，科学認識論におけるポストモダンへの転換と文化的アプローチに関して述べる．地理学をふくむ社会科学の学問的基盤について，ポストモダン論は大きな問題提起をしたが，そこでは「文化的アプローチ」が重要な意味をもつことを，まず第一に指摘したい．

第二に，現代における文化的アプローチについて述べる．文化的事象の理解にさいして，文化的アプローチが何をもたらしうるかを整理したい．

第三に，文化的アプローチに関する理論的考察について述べる．文化的アプローチは，まず第一に微細な考察，ミクロなプロセスについての分析を重要視する．問題は，それがグローバルな考察にまで到達しうるか，という点である．第3部では，この疑問に対して回答を試みたいと思う．

かつて1960年代の半ば頃，フランシュコンテ地方を対象とした研究で，私はもっぱら経済的アプローチを用いることにより産業活動の立地を説明した．地理的現実の大きな部分を捨象したわけである．地域の社会的側面，政治的側面，文化的側面など，初期の研究で捨象した諸側面について，その

後は考察を広げることに私は努力を注いできた.

また，それまで社会科学の基盤をなしてきた考え方が，その頃から強い批判にさらされるようになった．すなわち，社会科学は，物理科学や生命科学と同じ性格の科学であろうか，という疑問が提起されるようになった．従来まで主流をなしてきた科学認識論を疑問視する動きがあり，私はそのような流れに身を投じた．ポストモダンという言葉は，そうした流れを表現する言葉として，その頃に生み出されたものである．この立場にたつと，社会科学（とりわけ地理学）はどのように再構築されうるか，これが1980年以降において，私が取り組んできたテーマといえる.

そうした歩みのなかで，文化的アプローチを採用することこそ正しい道である，という結論に私は到達した．地理学に新しい基盤を提供できるのは，まさに文化的アプローチである．こうした考え方を共有する地理学者が，他にも存在した．1985年以降，アングロサクソン諸国において「新しい文化地理学」New Cultural Geography が発展したが，その方向性は私がフランスで追求していたものと共通していた.

私見によれば，地理学者の大部分は，文化的アプローチの本質をまだ十分に理解していない．また，それが地理学に何をもたらしたかを，十分に把握しているとは言えない．そのような状況のもとで，「文化的アプローチ」が現代の地理学においてどう位置づけられるかを考察することは，大きな意義を有するように思う.

Ⅰ　科学認識論におけるポストモダンへの転換と「文化的アプローチ」

Ⅰ－1　人の多様性，人間集団の多様性，場所の多様性

新しい文化地理学の出発点としては，従来の科学方法論に対するポストモダン的観点からの批判に触れておくのが適切であろう．19世紀から1960年代まで，科学方法論を支配していたのは，近代的（モダン）な方法論であった．社会科学においては，人間が「社会における人間」として研究されたといえる．そこでは，人間とか社会の本性が自明のこととされた．したがって，そこでは不用意にも，人間性や社会的結合や社会形態について，特定の理念がその含意を考慮することなしに安易に適用された．こうした暗黙の理念的前提は，考察の全体に大きな影響をもたらし，ときには考察の有効性を失わせたといえる.

これに対して，ポストモダンの科学認識論（Claval, P., 1992；Curry, M., 1991；Dear, M., 1988）では，抽象的な存在としての「一般的な人間」は存在しない．われわれが観察し，また考察の対象にするのは，個人個人別々の具体的な人間である．年齢によっても違うし，ジェンダーによっても，自然環境や社会環境によっても異なる「具体的な人間」である．実際の社会が，男性と女性，子どもと大人と老人，定住的な人々とノマディックな人々からなることを，われわれはもはや捨象することができない．それは，人口学における個々人の縦断的な分析や，ヘーエルストランドが1970年代に導入した時間地理学（time geography）がもたらした大きな教訓だったといえる（Hägerstrand, T., 1970；Carlstein, T., Parkes, D. and Thrift, N., 1978）.

Ⅰ－2　物質性，歴史性，地理性

こうしたポストモダンの観点は，本質的な認識論的意味をもつ．個々人を状況に規定された存在として捉えることは，地理学にとって3つの重要な帰結をもたらす．

（1）地理学があつかう人間は抽象的な構築物ではない，という点．それは，具体的な存在であり，つねに特定の状況のもとで考察される．もし彼らの肉体や生活行動や意識や所有物について知るところがなければ，彼らを理解することはできない，ということである．あらゆるポストモダン的考察にとって，この物質性（具象性）は中心的な意味をもっている．

（2）研究対象となる人間は，特定の時代，特定の社会に所属している，という点．彼らは，時間の外に存在することはできない．彼らが遭遇した事件や，彼らが過ごした時代の風潮を理解せずに，彼らを理解することは不可能だ，ということである．この歴史性も，ポストモダン的アプローチにとって同様に重要である．

（3）人間は，つねに物質的かつ社会的な環境のなかに存在する，という点．すなわち，彼らは，つねに具体的な場所に所属している．抽象的な空間や，どことも分からない空間に人間を位置づけることはできない．人間は，具体的な特定の場所，具体的な景観をともなった場所のなかで育まれる，ということである．この地理性という条件は，ポストモダン的考察にとって3番目の柱といえる．

Ⅰ－3　人間，人間集団，場所の関係的把握

一般的な人間ではなく個別的な人間を考察すること，一般的な社会ではなく個別的な人間集団を考察すること，一般的な空間ではなく個別的な場所を考察すること，こうした考察態度は，科学的な営みに根本的な転換をもたらす．人間とか社会とか空間といった概念は，もはや定義することが容易な概念ではなくなる．また，従来しばしばそうであったように，固定的な概念でもなくなる．それは，環境や時代や場所におうじて変化する存在である．すなわち，それまで実体的なものとして捉えられていたものが，関係的な概念へと移行したわけである．

人間は，永続性をもつ一般的な存在ではない．抽象的な概念ではない．それは，具体的に観察できるものである．たとえばそれは，ワルシャワで暮らし，社会主義体制の崩壊後に企業で事務職についているエヴァという名前の1968年生まれの女性である．彼女は，1950年代にワルシャワ市の北に建設された団地に住んでいて，職場を同じくする同僚と親しくつき合い，ある合唱団に所属し，マゾヴィー村の出身であり，地元の中学で学んだのちトルン大学に進学した．読書を好み，テレビもよく見る，という具合である．

また，たとえばそれは，1924年生まれで，ヘルマンという名前の男性である．若くしてドイツ軍に入隊し，ロシア戦線で負傷し，戦後に復員した．彼は，祖父や父親と同じように鉱山で働き，労働組合に忠実であり，困難な時期を戦後に経験したけれども，その後は労働界で出世をはたした．引退したのち，彼がかつて過ごした炭鉱社会は危機にみまわれ，鉱山は閉鎖された，という具合である．

新しい文化地理学の研究とは，こうしたワルシャワのエヴァや，ドルトムントのヘルマンを研究の

出発点として受け入れることである．ポーランド社会とか，ドイツ社会から考察を出発させることでは決してない．それは，人々を彼らが織りなす関係から把握することであり，彼らがもっている知識や，彼らが分かちもつ世界から把握することである．

それはまた，固定的な存在，一般的な人間などというものが存在しないことを認めることであり，それぞれが特定の文化に根ざした個別的な男性あるいは個別的な女性のみが存在することを容認することである．従来の認識論に対するポストモダンからの批判は，かくして文化的アプローチを地理学研究の中心に据えることになる．

Ⅰ－4　表象としての地理，ディスクールとしての地理

科学的考察の基礎に関するポストモダンの主張は，また別の帰結をもたらす．ポストモダンの主張によれば，人間は周囲の事物に対して直に接するわけではない．彼は，それを感覚し，パーセプションとして受け入れ，それに基づいてディスクールを作りあげる．近代的な研究手法は，われわれの感覚を補い，それまで観察が不可能であった現象やスケールにまで，われわれを接近させた．また，実験という手順は，現象の認識に規則と厳密さを持ち込むことによって，認識の形成から主観的な部分を大きく排除した．しかし，科学的な手順も社会的な規約に基づいており，絶対的な理性が純粋に科学的な知識を生み出すというイメージには程遠い．

こうした観点に立つと，いわゆる「科学的」地理学と，これまで無視されてきた「民衆の」地理学とは，それほど大きく違わないことになる．かくして，新たな研究の方向性が開拓されることになった．

（1）科学的地理学の著作は，読者に向けて執筆される．それは，文章によって表現される．それは多様なディスクールの伝統のなかに位置し，そうした伝統がその内容を部分的に規定する（Berdoulay, V., 1988）．

（2）民衆の地理知識（ethnogéographies）が，きわめて興味深い考察対象になる（Claval, P. et Singaravélou, 1996）．

（3）地理学の歴史は，かつての科学的地理学が，今日の科学的地理学とかなり異なっていたことを教えてくれる．ここでも，「民族の地理学」的な（ethnogéographique）観点が，きわめて有効である（Jacob, C., 1991；Staszak, J.-F., 1995）．

Ⅱ　現代における文化的アプローチ

旧来の世代に属する地理学者の大部分にとって，文化は（ちょうど人間や社会がそうであったように）抽象的な存在として把握されてきた．個々人の外部に存在し，それが個々人に押しつけられるような「もの」として，文化が捉えられたわけである．こうした観点は，アメリカの文化人類学者たちや，バークレイ学派の地理学者に共通する見方であり，第二次世界大戦前から1960年頃まで引き継がれてきた．

これに対して，ポストモダンの観点にたつと，文化とは「個々人がその生活を通して獲得し，変化

させる知識や技術や習慣の総体」ということになる．世代が違えば，その中身は当然のことながら変化する．環境条件が変わるし，それを使いこなす新しい技術が現れるからである．また，個人を取り巻く環境は，一人一人異なる．親戚や隣人や友人たちといった個別的な環境のなかで，個々人はそうした知識を獲得する．したがって，文化は単一の全体的存在物ではない．それは，無限に多様な総体であって，しかも常に変化している．

こうした認識にたつと，新しい文化地理学がミクロな研究を重視するわけがよく理解できる．そこでは，まさにパーセプションが形成される時点とか，信念が動揺する時点とか，愛着が再編成される時点とか，新たな概念が生まれる時点とかが，好んで分析されることになる（Richardson, M., 1981；Mondana, L. et Söderstrom, O., 1993/94）．

文化的事象は，すべての社会科学にとって関心の対象である．社会科学的な研究や，とくに地理学的な研究から，個人やグループや場所といった存在が形成されるさいの論理を導きだすことができる．

Ⅱ－1　個人の軌跡，文化，共同主観の範域

人々が彼らを取り巻く環境から知覚したり経験したりすることは，空間的に限定されており，また時代的な刻印をともなう．個々人が，個人的な経験をえたり環境を探索できるのは，彼が日常的に接し得る範囲（あるいは，長期にわたる移動の経路沿い）に限られている．

文化に対するポストモダン的観点からいうと，個人は「文化」を何らか「出来合い」のものとして受容するわけではない．個々人は，みずからが属する接触のネットワークや，情報や記号を受け取るコミュニケーションのネットワークを通じて，文化をいわば構築していく．したがって，文化は，彼らが所属している相互コミュニケーションの範域に対応している．この点に関しては，しばしば共同主観の範囲ということがいわれる．すなわち，相互の関係が十分密接であるために，記号に付随する経験が相互に同一であるような範囲である（Staszak, J.-F., 1997）．もちろん，コミュニケーションの手段が，会話であるか文章であるかテレビであるかによって，「共同会話」空間や「共同文章」空間や「共同テレビ」空間を考察することも可能であろう．

Ⅱ－2　文化の構成要素：環境技術，社会技術，価値

文化に関連する事柄を整理する2番目の視点は，文化の内容（すなわち，意識や知識，習慣，態度，信念などといった文化の中身）を構成要素に着目して捉えることである．それは，大きく3つに分類される．

（1）まず第一は，環境に関する知識や技術である．世界のなかに自らを位置づけたり，環境の善し悪しを判別したり，移動したり，環境を利用する道具を造ったりというのが，このカテゴリーに属する．

（2）第二は，社会のなかに自分を位置づけるための知識や技術である．あるいは，社会で用いられているコミュニケーションのコードを理解したり，社会的な組織のメカニズムに関する知

識や技術である．

（3）しかし，世界と社会に関する理解だけでは，行動にとって不十分である．行動するためには，目標を設定することが必要である．そこで，文化を構成する第三の要素は，現在ある世界とは別に，「あるべき世界」についてのビジョンということになる．それが，行動に指針を与え，人間存在を意味づけることになる．こうした価値の領域は，他の2つの側面と結びついて，環境に関するビジョンとか，社会に対する評価とか，あるいはむしろ悪影響をおよぼす理念とかを生み出している．

社会科学は，しばしば人間と自然を対立的に把握する．これに対して，文化的アプローチは，オギュスタン・ベルクが指摘したように，個人やグループが環境のなかで形成される点を重視し，こうした観点から環境を理解し解釈することを要求する（Berque, A., 1990）．環境は，なによりもまず社会的なカテゴリーであり，それが持つ意味や，それが担う意味を知ることで，初めて十分に把握することができる．

Ⅱ－3　分析的なコミュニケーション，象徴的なコミュニケーション

このようにして，文化とは各個人の内的な条件と，彼が置かれた相互作用の場が合わさって形成されたシステムとみなすことができる．しかし，外的な場における関係の性質は，つねに同じというわけではない．

（1）大部分の場合，コミュニケーションはAという個人からBという個人に情報を伝えるために行われる．この場合，最初の時点では，両者は対等ではない．Aは知っており，Bは知らないからである．情報が伝えられて，両者のバランスが達成される．こうしたコミュニケーション（すなわち分析的なコミュニケーション）は，知識の伝達において重要な役割を演じる．

（2）しかし，これとは別のコミュニケーションもある．その場合，プロセスは分析的ではなく，象徴的である．AとBは，最初から同じ文化を共有している．AからBに伝えられることは，新しい知識ではない．それはシグナルであり，その伝達の目的は，AとBが共有する文化システムを呼応させることにある．こうした象徴的なコミュニケーションにおいては，情報の伝達が目的ではなく，同じ知識を共有するもの同士，親近感を感じ合うことが主要な目的といえる．他方では，シグナルが両者の差を際だたせてしまうこともある．

分析的なコミュニケーションでは，空間が強力な障害物として機能する．そこでは，大量の情報を伝達することが必要であり，情報の中身におうじて，対面接触が必要な場合もある．

これに対して，同一の価値をもつ人々を結束させたり，異なる価値をもつ人びとを対立させるためには，しばしば短いフレーズで十分なので，距離の障壁はあまり大きな問題にならない．こうした象徴的なコミュニケーションは，地理的にみると2つの機能をもっている．一つは，遠く離れて位置する人びとを団結させることである．第二は，これと逆に，近くに位置していても，宗教やイデオロギーを異にする人々を，たがいに遠ざけることである．

Ⅱ－4　制度化と文化の象徴的構築

各個人は，絶え間なく変化する文化システムの担い手であり，またその文化システムは価値によって構造づけられている．これらの価値は，彼らのライフコースのなかで獲得されたものであり，教育や経験に基づいている．ただし，価値は超越的なものに対する信念から生まれるものなので，個々人の直接的な環境体験から生まれるというよりも，他の人々との接触から生まれることが多い．

したがって，個々人の文化システムのなかで，集団的な作用がもっとも強く働くのは「価値」の領域である．そのことを良く示しているのが，個人の成長におうじて熱心に行われる儀式であり，そこでは個々人が集団の規範に適合するようメッセージが伝達される．制度化された通過儀礼的な儀式は，共有される価値について考えさせ，集団にとって重要なテーマを全員に浸透させる役割をはたしている．

こうした価値や制度や通過儀礼を通して，個々人の文化は「象徴的なシステム」に統合されるわけであり，それが個人や集団の存在に意味をあたえ，違いや共通性（すなわちアイデンティティ）を規定する役割をになっている．

したがって，全体としての文化は「一つの現実」ではなく，イメージの上の存在といえる．それによって，コミュニケーションが可能になり，共同感覚や違和感覚を生みだし，団結力の強い集団を形成させる．

社会を構成する個々人は，独立した存在とはいえない．上で述べたような相互関係的な観点にたつと，個々人の特性は，彼らが環境や周囲の人々と結ぶ「関係のあり方」に由来している．個々人の自我は，受け入れるにしろ捨て去るにしろ，社会的なモデルに立脚して形成される．社会との結びつきを抜きにして，個人の内的世界を理解することはできない．

Ⅱ－5　超越的な存在

個人の内的な文化システムを支える価値は，超越的な存在に対する参照状況によって規定される．それゆえ，文化的アプローチにおいては，それらが想像上の産物だからといって，天国や地獄（あるいは善と悪）などを無視することはできない．個々人が何を真理とみなし，何を根本とみなすかは，まさにそれらを出発点にしているからである．あらゆる文化的事象は，哲学的あるいは宗教的な理念と結びついており，時間や空間の存在論と無縁な議論はありえない．

こうした状況の理解に対して，ミルチャ・エリアーデがなした貢献はきわめて大きなものがある（Eliade, M., 1949/1965；Dardel, E., 1952）．彼は，宗教的な超越的存在について考察したが，彼の考察内容は，古代の超越的な形而上理念に対しても，また現代社会における超越的イデオロギーに対しても，容易に適用することができる．エリアーデが展開した中心的な論点は単純である．すなわち，われわれを取り巻く知覚可能な世界は不完全なものである．それとは別に，より真正な世界が存在し，それを参照することで現実の理解が可能になり，あるいは現実世界のモデルとして機能する．さらに，このような超越的世界は，容易に時代を飛び越えて，原初の時代や，過去の黄金時代，あるいは未来のユートピアなどに展開される．あるいは，このような超越的世界が，別の空間に存在する

場合や，天上や地下に存在する場合や，抽象的な領域に存在する場合など，さまざまな場合がありうる．

このような超越的世界の考察は，地理学にも直接かかわっている．それを考慮することで，初めて「聖なる空間」と「俗なる空間」の区別が可能になるし，どのような儀礼や空間編成によって「聖なる空間」が使われ，あるいは保護されるかを理解することができる（Bonnemaison, J., 1986/1992）．

Ⅲ　文化的アプローチに関する理論的考察

文化的アプローチの発展は，20世紀初め頃における博物学的観点や，1960年代に展開された論理実証主義的なニュージェオグラフィに対する批判運動の主要な一側面といえよう．それらのいずれもが主張した一般化の論理が，あいまいで不十分な前提に基づいている以上，結果として得られた一般法則も存立の基盤を失うことになる．こうして，多くの地理学者が，いわば反動として行き過ぎた相対主義に逃げ込んだ．しかし，このような態度も正しくないように思われる．慎重にやりさえすれば，文化的アプローチと規則性の発見は両立できないわけではないからである．

Ⅲ－1　基本概念の定義

文化的アプローチにおいて，地理学は基本的に「人間の空間」に関する考察である．これが意味することは，地理学がその目的を達成するためには，距離とか位置とか境界とか範囲とかの概念だけでは不十分だということである．これらの純粋に物質的な概念にこだわっている限り，人間と社会を形づくる情報の流れや相互作用の働きは，われわれの視野から抜け落ちてしまう．適切な説明が不可能になるばかりか，特性を生み出したり，シンボルへの愛着や団結をもたらす経験の総体が，われわれの視野から失われてしまうことになる．

地理学が世界や地域の自然的記載であるかぎり，地理学は社会的現象を正しく考察することが困難になる．地理学が取り扱うべき対象の特性を正しく把握するためには，これらとは別の基本概念が必要である．単に幾何学的な広がりである「空間」（espace）に代わって，「領域」（territoire）という概念が必要である．領域は権力の闘争を反映し，支配・整備・居住・開発などといった行為を反映している．それは，自然的な次元と，社会・政治的な次元，さらには文化的な次元をあわせもった概念である．また，出現頻度の低さによって定義づけられる例外事象という概念の代わりに，リスクという概念を用いるべきであろう．そうすることで，破局がもたらす破壊や人命の喪失，生活の混乱などを示すことができる．

こうした基本概念のなかで，最も重要なのは明らかに milieu（風土）である（Berque, A., 1990）．この概念によって，人間と彼らを取り巻く物質環境の相互作用を初めて十分に捉えることができる．物質的な諸力を反映すると同時に，社会組織や人間の夢を反映する「景観」という概念も同じグループに属する．

Ⅲ－2　相対主義の限界

（1）一部の人々にとっては，あらゆる一般法則が不可能である．なぜなら，人間にしろ社会にしろ景観にしろ空間組織にしろ，地理学が取り扱う対象はきわめて異質なものの集合だからである．古典的な認識論に対するポストモダンからの批判は，このようにして相対主義に陥りがちである．彼らにいわせると，個々の具体的な事例に関してのみ記述が可能である．

しかし，異なった解釈の可能性もある．人間はたがいに完全に異質だろうか．この問いに対する回答はノーであろう．一見まったく異なっているようでも，自分の個人的な体験にもとづく状況とよく似た状況をみいだすことは多い．解釈という行為を通じて，個人や集団の見かけ上の多様性のなかから，多くの共通点を発見することができる．このようにして，現象学は個別事例の分析から，より一般的な考察への移行を可能にする．

（2）地理学におけるポストモダン的アプローチにおいては，個々人の軌跡が分析の基本になる．人間の多様性や，人間と環境の係わり方の多様性や，人間の体験の多様性や，集団と人間の係わり方の多様性は，そのような分析を通じて初めて可能になる．「新しい文化地理学」（New Cultural Geography）が盛んなアングロサクソン系の諸国では，こうした立場が，必然的にミクロスケールにおける個人レベルでの研究を優先し，早まった一般化を避けるものと見なされてきた．

しかし，この慎重さが「行き過ぎた」慎重さではないかとか，ミクロな文化プロセスを明らかにしてもメソやマクロの現実は理解できないのではないか，という疑問も同時に存在する．慎重さが大切なことは明らかである．個々人の軌跡は，２つとして同一なものがない．また，相互作用から生まれる人間集団にしても，その範囲はしばしば不明確である．なしうる一般的な言明は，統計的な意味しかもたないであろう．すなわち，それは厳密な意味での因果関係を述べているわけではなく，ある種の状況のもとで卓越する特定の論理や価値を示すのである．

Ⅲ－3　相対主義からの脱却

たしかに，文化的プロセスが個々人に個別的な特性を与えがちなことは否定できない．また同様に，文化的プロセスが明確な境界線をともなう地域的まとまりを生み出さないことも，明らかな事実であろう．しかし，文化的創造やその伝播の結果として生み出された世界に，規範的な性格がまったく見られないわけではない．ある共同体に属する構成員は，そこに特有な道徳的あるいは宗教的規範にみずからを合致させようとするであろう．また政治的思惑は，彼らを明確な境界線をともなう領域に閉じこめるかもしれない．文化的アプローチは，この種の制度化された秩序と実際に生活が展開される空間組織との間にみられるズレを，研究の重要な着眼点としている．しかし同時に，現実の生活がこうした制度化された秩序によって，いかに大きく制約されるかを示しもするのである．人間の多様性と社会の流動的な性格は，これらの制度的規範によって限定されているのであり，これらの制度的規範が人間行動の標準化や特定のコミュニケーション・ルートの発達（換言すると，それ以外のルートの矮小化）をもたらしている．

他方，価値と結びついた行動は予見可能である．もちろん，価値的側面を考慮したモデルは，万国共通の一般性をもちえない．ある地域では通用しても，またある時期には通用しても，他所では通用しない．すなわち，その価値を共有する人々についてだけ有効である．かつてマックス・ウェーバーが行ったように，卓越的な倫理的規範にもとづく社会の方向性を明確に示すために，理念型（Ideal Typus）を利用することも効果的である．それはまた，なされるべき選択と実際になされた選択との間につねに存在するズレを明らかにするためにも役に立つ．

Ⅲ－4　生態学的制約の重要性

個人的状況の多様性を減少させ，錯綜した関係のパズルを明確に区切られた流動の束に整理する要因としては，生態学的な制約をあげることもできる．多くの文明において，集団の構成員が消費するものの大半は，ごく近隣の空間から入手される．それらの資源の開発は必然的に一定の秩序を生み出すし，同時に所有権の形成や土地システムの成立をもたらす．伝統的な社会では，人間たちが織りなす関係の大部分がかなり狭い範囲で完結し，そのなかで生産活動が行われることになる．

Ⅲ－5　文化の変容

文化的アプローチは，地理学的分析にさいして，いくつかのカテゴリーをとくに重要視する．

（1）コミュニケーション．その手段と，分析的あるいは象徴的次元が問題になる．

（2）個人および集団の形成．アイデンティティ，その性質と役割が問題になる．

（3）環境との関係．生態学的次元，機能的あるいは象徴的，美的な次元が問題になる．

（4）景観．

いずれにせよ，文化的アプローチを社会プロセスや環境との結びつきに適用し，そこから教訓をくみとることで，初めて経済形態や社会・政治形態の空間的側面について正しい理解が得られることになる．また，そうすることで初めて，コミュニケーション手段の進歩やメディアの発達，価値の変化などがもたらした革命的な空間変化の意味を正しく認識することができる．

一般化が可能であるという事実が，こうした考察を通じて理解され始めている．たとえば，マイケル・マンがイギリスで行った研究は，権力の伝統的な基盤や政治的空間組織の変化を吟味することによって，このような可能性を示している（Mann, M., 1986）．

Ⅳ　結　　論

文化的アプローチを採用することの意義は，地理学に新しい研究分野をもたらすことではない．研究分野という意味では，文化地理学は長い伝統を有している．文化的アプローチを採用することの意義は，その考察方法の新しさにある．旧来の考え方においては，人間や社会がしばしば抽象的な存在として把握され，人間や社会それ自身について地理学は何ら問いかけることがなかった．かくして，旧来の地理学は，地表の多様性のうち基本的な側面を無視してきた．文化的アプローチは，このような欠点を克服しようとするものである．文化的アプローチを採用することで，人文事象の物質性・歴

史性・地理性を合わせ考察することができる．また，コミュニケーションの役割を重視することにより，個人と集団が織りなす絶え間ない変動のなかで，人間と社会の流動的な関係を捉えることができる．

たしかに，文化的アプローチはあまり華々しいものとはいえない．しかし，それは確固とした基盤の上にたって，人間と集団と場所の特性を生み出すすべての要因に対して，より開かれた学問的営みを保証してくれるものであるとは言えるだろう．

（手塚　章訳）

（訳者注）本稿は，1999年２月10日（水）に筑波大学で行われたクラヴァル教授（パリ・ソルボンヌ大学名誉教授）の講演を再録したものである．同様の内容をさらに敷衍したものが，Géographie et Culture 誌にも掲載されている．ポール・クラヴァル教授は，筑波大学国際交流計画事業の招へい研究者として1999年２月７日から28日まで筑波大学に滞在された．また，同じ年に，クラヴァル教授に対して筑波大学の名誉博士号が授与されたことを付け加えておきたい．

参考文献

Berdoulay, V., 1988, *Des mots et des cartes.* Paris, CNRS.

Berque, A., 1990, *Médiance: de milieux en paysage.* Montpellier, Reclus.

Bonnemaison, J., 1986, *Les Fondements d'une identité: territoire, histoire et société dans l'archipel du Vanuatu.* Paris, ORSTOM.

Bonnemaison, J., 1992, Le territoire enchanté: croyances et territorialités en Mélanésie. *Géographie et Cultures,* 1(3), 71-89.

Carlstein, T., Parkes, D. and Thrift, N. (ed.), 1978, *Timing space and spacing time.* London, Arnold.

Claval, P., 1992, Postmodernisme et géographie. *Géographie et Cultures,* 1(4), 3-24.

Claval, P. et Singaravélou (ed.), 1995, *Ethnogéographies.* Paris, L'Harmattan.

Curry, M., 1991, Postmodernism, language and the strains of modernism. *Annals of the Association of American Geographers,* 81, 210-228.

Dardel, E., 1952, *L'Homme et la Terre.* Paris, PUF.

Dear, M., 1988, The postmodern challenge: reconstructing human geography. *Transactions of the Institute of British Geographers,* 13, 262-274.

Eliade, M., 1949, *Traité d'histoire des religions.* Paris, Payot.

Eliade, M., 1965, *Le Sacré et le profane.* Paris, Gallimard.（原書は1957年刊行）

Hägerstrand, T., 1970, What about people in regional science. *Papers of the Regional Science Association,* 24, 7-21.

Jacob, C., 1991, *Géographie et ethnographie en Grèce ancienne.* Paris, A.Colin.

Mann, M., 1986, *The sources of social power: Vol.1, A history of power from the beginning to A.D. 1760.* Cambridge University Press.

Mondada, L. et Sölderstrom, O., 1993, Lorsque les objets sont instables: (1) Les faits culturels comme processus. *Géographie et Cultures,* 2(4), 83-100.

Mondada, L. et Sölderstrom, O., 1994, Lorsque les objets sont instables: (2) Des espaces urbains en composition. *Géographie et Cultures,* 3(4), 87-108.

Richardson, M., 1981, On the superorganic in American cultural geography: commentary of Duncan's paper. *Annals of the Association of American Geographers,* 71, 284-287.

Staszak, J.-F., 1995, *La Géographie d'avant la géographie: le climat chez Aristote et Hippocrate.* Paris, L'Harmattan.

Staszak, J.-F., 1997, Dans quel monde vivons-nous? Géographie, phénoménologie et ethnométhodologie. in: Staszak, J.-F. (ed), *Les Discours du géographe.* Paris, L'Harmattan, 13-38.